

ヤンデレの精神構造 - なぜヤンデレ化してしまうのか

「ヤンデレ」 諸説あるが、一般的には「精神的に病んでデレデレしている状態」=「病んでいるデレ」
愛しているゆえに強烈な嫉妬や独占欲を覚え、パートナーを追い詰めたり、傷つけたり、場合によっては殺害するなどの衝動的で異常な性格や行動パターンおよびその性質をもつキャラクター
× 精神病
○ 属性

2005 年以降 美少女ゲーやアニメなどの女性キャラクターに見られる
2001 年以降に確率した「萌え」要素のひとつ
「ツンデレ」の先鋭化した形
M 気質、破滅願望の読者のニーズに合致した
美少女などの愛情が本人、恋愛対象、友人などへの異常な攻撃性に結びつく
「黒化、暗黒化、黒姫化、L5 発症 ⇔ 白化、きれいな O ×
二律背反しながら内包している屈折した魅力が本質

「ヤンデレ」の定義が明確化されていない
→ 「ツンデレ」「萌え」で対応できるから？
→ 精神医学の背景がないから？
性格・嗜好(属性)の分類のひとつか？

古くからある愛情表現の女性を「ヤンデレ」と命名してキャラクター化したことでオタク達に浸透した。
女性に限定する × 男性

同義語:

パラフィリア
[paraphilia]【心理学】性欲倒錯. 性的倒錯. 異常性愛.

例:
ギリシア神話 ゼウスの妻 ヘラ
メディア
ユダヤ古代誌
新訳聖書 ヘロデの娘 サロメ

インド神話 創造の神ブラフマーの妻 サラスヴァティー(日本の弁財天)
昭和 11 年猟奇殺人 阿部定
ストーカー殺人世界最古のヤンデレにはギリシャ神話のヘラやメディアを挙げます。
(どちらも手段を選らばないし、サロメなんてかわいいほうです。)

46代孝謙上皇(再び即位し48代称徳天皇)=道鏡(どうきょう)というお坊さんに深く心酔
六条御息所より何枚も上手だと思います。

ルーツ
「うる星やつら」ラムちゃん → 諸星あたる、ライバルしのぶ
2002 年オンラインゲーム ラグナロクオンライン」

テーマ曲「お兄ちゃんどいて！そいつ殺せない！」

Wikipedia

厳密な精神医学理論の背景が存在するわけでもなければ主として医療知識に基づくわけでもない、ゲームプレイヤーおよびゲーム評論によるヒロイン分析法によって作られたキャラクター類型であるが、パラフィリア(性的倒錯)や躁鬱状態に陥った状態で描かれることが多い。正常な状態からヤンデレ化することを「病み化」、「闇化」、「黒化」などともいう。好意を持つ、あるいは交際相手への愛情表現の異常な度合いがファンの間で好まれる。

(性的倒錯(せいてきとうさく)は、広義には性道徳や社会通念(常識)から逸脱した性的嗜好(せいてきこう)を指す。ただし、性道徳や社会通念は抽象的な概念であることから、その基準や境界線は時代や文化、個人の価値観によって多様な解釈や定義が存在する。また、それらの多様な解釈や定義が偏見や差別の原因となる場合がある。)

ただし、定義は流動的で語の使用者によって意味が異なることも多い[4]。例えば、『にゅーあきばこむ』では「心を病んだヒロインへの萌え属性」としており[5]、『ケータイ Watch』では「精神的に病んでいるかのようにデレデレしてしまうキャラクターのこと」としている[6]。境界性パーソナリティ障害を思わせる面があると指摘されることもある[7]。相手のことが好きすぎて殺してまでも手に入れようとする思考。

ヤンデレは、キャラクターの形容語の1つ。「病み」と「デレ」の合成語であり[1]、広義には、精神的に病んだ状態にありつつ他のキャラクターに愛情を表現する様子を指す。その一方、狭義では好意を持ったキャラクター(「デレ」)が、その好意が強すぎるあまり、次第に精神的に病んだ状態になることを指す[2][3]。

歴史・考察

ヤンデレという語が知られるようになったのは

2005年に発売されたアダルトゲーム『School Days』および

同年に放送されたテレビアニメ『SHUFFLE!』

がきっかけであるとされている[8]。その後、ヤンデレのキャラクターが登場する漫画やアニメ、ゲームが注目され、ブームとなった[8]。

ただ、ヤンデレという言葉ができる以前から、

『ダイヤモンドは砕けない』(1992年)の山岸由花子や、

『きみとぼくの壊れた世界』(2003年)の櫃内夜月のように、それに当てはまるようなキャラは複数存在したが、萌え属性の一種として評論などで言及されることはなかった。

『School Days』を制作したオーバーフローの代表・メイザースぬまきちは、ヤンデレの流行について

「自分に対する一途さや寄せられる好意をより強く求めたい感じたいというあらわれの1つ」と述べている[9]。

また、メインヒロインの1人である桂言葉がヤンデレキャラと呼ばれていることに対しては、「ヤンデレというものを狙っていたわけではないので、『しめしめ、やった』というよりも、ありがたい授かりものという感覚ではあります」と述べている[10]。

また、キャラクターのビジュアル面での要素が飽和状態になっていることを指摘した上で、「ツンデレ・ヤンデレは外面から内面の時代になったあらわれ」と述べている[11]。

ただし、『SHUFFLE!』については原作ゲームにヒロインのヤンデレ化が存在しないことから、声優や原作ゲーム会社のスタッフがテレビアニメ版を疑問視するコメントを述べており、メディアミックス展開での「黒化」の一例として取り上げられることもある。

脚注

- 1.^ 「GyaO、“ヤンデレ”アニメ「School Days」をR指定で配信 -最終話が「Nice boat.」と称えられた話題作」AV Watch、2008年12月1日。
 - 2.^ 『まじカル! 2008SP』、p.20。
 - 3.^ 身辺雑感/脳をとろ火で煮詰める日記:「ヤンデレ大全」こぼれ話 -キャラの収録基準について-
 - 4.^ 病み鍋 PARTY
 - 5.^ 萌えの歴史を把握できる「萌え俯瞰図」に「ヤンデレ」追加 :にゅーあきばどっとこむ
 - 6.^ ツンデレ/ヤンデレのキャラが選べる「萌えるタクシー予約」
 - 7.^ ヒロヤス・カイ『オタクの考察』シーアンドアール研究所、2008年、131頁。ISBN 978-4903111728。
 - 8.^ a b 『まじカル! 2008SP』、p.21。
 - 9.^ 『まじカル! 2008SP』、p.35。
 - 10.^ 『まじカル! 2008SP』、p.31。
 - 11.^ 『まじカル! 2008SP』、p.38。
- 参考文献、参考資料[編集]『ヤンデレ大全』インフォレスト、2007年。ISBN 9784861902604
『現代視覚文化研究 Vol.2』三オブックス、2008年 付録『まじカル! 2008SP』。ISBN 9784861991233

松本ミーコハウス「恋のまんなか」
まさお三月「明日も他人」
北上れん「ひとり占めセオリー」
麻生ミツ晃「スイートビターキャンディ」
腰乃「隣の」
池玲文「銀閣博士のモルモット」
紺野けい子「かわいい人」
門地かおり「第二ボタンください」
西原ケイタ「わかってくれとは言えないが」
門地かおり「恋姫」後日談「デジャヴ」(新装版)
田中鈴木「メンクイ」
鹿住 禎「ヤバイ気持ち」
本庄りえ「科学室へどうぞ」
ねこ田米蔵「神様の腕の中2」
館野とお子「ピース」
依田佐絵美「愛くらいちゃんと」
高嶋 上総「犬も歩けばフォーリンラブ」
藤谷陽子「愛してる」
柚摩サトル「花道恋しぐれ」
木下けい子「キスブルー」
門地かおり「メロメロのしくみ」
雁須摩子「こめかみひょうひょう」
山田ユギ「夢を見るヒマもない」「冷蔵庫の中はからっぽ」
明治カナ子「三村家の息子シリーズ」
阿仁谷ユイジ「ミスターコンビニエンス」

マンガ

「ヤンデレ彼女」
「オニデレ」